



近世祝美少年録

六編

四



13
3567
29



門 13
號 3567
卷 29

新編石童子訓卷之十四

東都 曲亭主人人口授編次



因果觀面懷金故不復宿緣不空孤獨舊家小寓

阿夏の老亭ハ吾足齋の舊世心體悔の顛末を聴く小惑ひハ晴るる。
霽ぬ涙の夜の雨袖の濡るを術多きを思ひ復々。嗚咽伏今をいめ
知る金子ののり。然あふ一とん思ひもろほを只身之ぬをの誠難て拘神の
を果一なる。晚縮の素より行状小免毛むもも疵か多心操之縲致之。
美一過給之陽炎の命短くあまをと思ひ過し親の愚癡富も榮ん
がを神不佛不願言の果ハ歎給の杜とある。実子よりいふを。三の千百十

石童子訓卷之十四

早稲田 大學 圖書館
昭和 34.6.3 収
藏 書

寸穂の繁薄招く甲斐ある魂招ひてぞあり。別路の親の因果の子報ふ例ありともいふれば親と子と同日夜ふ簪の垂氷の剣太刀身を殺しぬる哀しき事とて答へて散を揺動して線をも倭文の半環今茲ふ輪をて因果觀面昔阿夏がト向し彼神トの識文ふ子而非子非親是親とありし晩縮朱之奴考の上あるを思ひ惑ふ無明の醉のまご醒ぬ婦女子心ふとり乱して外看忘と一諄言を津向屋主僕慰難て愀然する开が中ふ深痰不屈せぬ吾足齋の頭を拾げ眼を睨りてやよや老亭愚癡をるひと俺隱患の報ひを思へ晩縮の横死も歎く小由多し然るをも往る六月某の夜小途ふ財囊を争ひし彼西箇の少年何等の人もあつらん倘命あり時ありて送ふ名告逢ふ日のあつれば俺這首級を授ん朝を俟て消てゆく露の玉の緒絶るん折小稍本然

の善ゆも返る懺悔の我るごとく無益な事とて有りふ。吻く息とふ善いけるを染六郎の遠く。盆丸郎の掛る索の端を柱に結び止めて杖より吾足齋ふち向ひてきてまてのまう。どめての辛踏生斯の我が浪華より。大江社四郎成勝ふ相従ふて武者修行の為這地ふ来つ。峯張北六郎通能是之目今和老の懺悔をせよ彼夜二百九十五金の財囊を合も復さんと連りの挑と争ふ。其一人の我染六郎の件を捉られんとて後方逃み投遣り。其一人の別人あるを和老の渾家阿夏刀自の實子とていふる末朱之介晴賢とて有りふて言を盡さる猶疑し思ひ苦しき苦痛を忍びて听ねり。件の一美の箇様々々云々の精由ありとて落葉の媼が朱之介の為小慈善の事の顛末又彼二百九十五両の金子の来歴を語りめり染六の兄十三屋九四郎の美俠の子。當日朱之介が東

路へ追放せらるるを憐れとて柴六をもと金五兩を贈らんと追せしむ。その
宵十三屋の掛店へて落葉の媼の悲泣の折朱之欠り来て裏面へ
入らば竊取あり。其頭み措きて財囊の金を偷奪て走るを。柴六も亦
之の来て朱之欠の不美の爲体を既み宛知りされ跡を追つ曉路ゆて朱之
欠りと力戦して投懲り一隊調りて九四郎の取らせり。金五兩を授與へて
財囊を索令執りて十三屋へて之のて落葉の媼み渡りし執り知るべき財囊
の内なる二裏の金の金あるを。兩箇の小石にけれ人々疑惑せざるも。就中我
疎忽をいひ解しし。のありて兄弟九四郎の贖ふて其内中る金百兩を
落葉の媼み返さる。後安は似しれざる其疑ひに我も。今小解ししあり
し。小原来彼折財囊の金を奪りて小石を入易し。延明和老への去りとい
れて驚く吾足齋寔小然と云りし。阿夏の老亭由共侶み差して頭を低

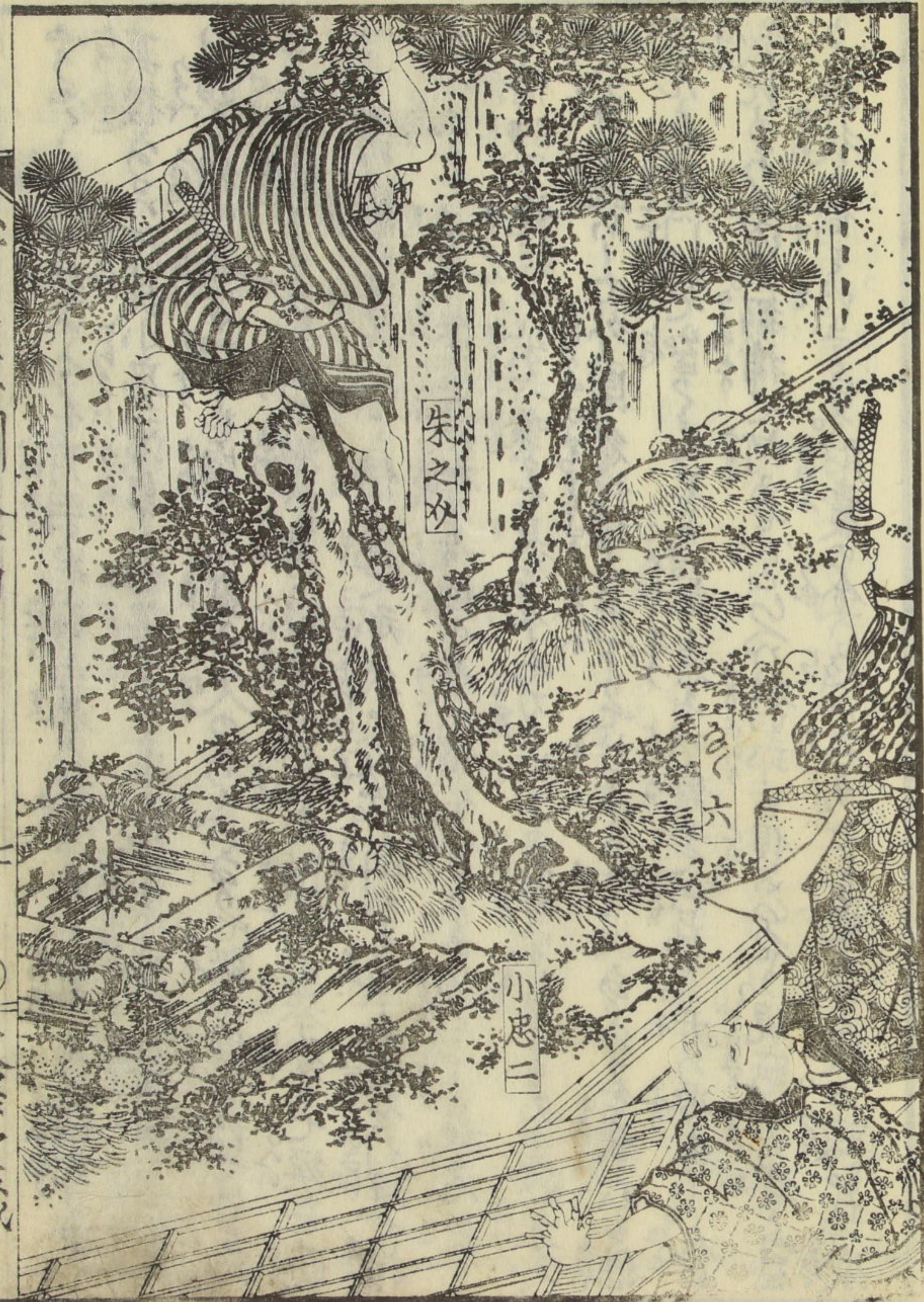
を。その上宛りて去りあり。のいもさや。あしや。て居り。當下杜四郎成勝の石見欠み會釋して。找せしむ。老亭み向ひて。
喃阿夏の老亭と云ん俺又柴六の舌み代りて驚らす。一話あり。和女郎の前
夫とせえ。末松木偶欠の実女む袖の小夏に年九歳の秋磨鏡嶺の賊難み
千仞の深谷へ抜降されて死をぐりしを神佛の冥助あり。りけん俺爲出
と。和女郎の言まいる。とあり。と。そうち歎給ふに其孝順を知つたの。況
と。和女郎の言まいる。とあり。と。そうち歎給ふに其孝順を知つたの。況
落葉の木偶欠み離別せられて再嫁らむ。和女郎を。心多しの世み繕る。
べ。貞女あり。其母女兒の孝貞実美を天道憐れ。ひけん。近曾住吉の十
三屋。母女再會の飲びあり。それと異る。和女郎の壽命所生の獨子朱
之欠の性境悪るれば。孝るるを。反て二箇の螟蛉女小夏と云。晚縮と云。性美

を心許り思へらちも措きて宿の主人の尻に跟せて自餘の客人共信
 庭門を来りて内へ入らんをぞや那里に立て在り程吾足老の
 懺悔の條々又朱之女の悪事の顛末這盆九郎とやんの心と
 就中感へ思ふ幸踏生の懺悔之人臨終に舊惡をよ
 懺悔ある者五逆十惡の罪戾も都て消滅せむとて必成佛と
 佛説の然るも懺悔の心と或へ偷へ或へ人の東西を借て返さ
 命終に彼身お益ありとふも是其人損あり然て其の成佛と
 を就て我那里の樹下小在り時月明ふより見知りぬ那捨廊の柱に
 吊りて正一箇の財囊あり我憶ふ那財囊の朱之女が偷へ合て庭より
 逃去し時憶む柱の脇に掛し心と
 放ちけん立戻りて合へ違ひは那裏へ逃く逃亡て財囊の柱に遺りあるん

俺這推量の中へ辛踏生の懺悔虚言す財囊中なる金
 一百九十五両ある歎不足を歎知りぬ其當初を推時ハ這春大和の上
 市る落葉の刀自が朱之女の沙金と唐布を買せんを齋し金
 辛踏生先非を勸解て本主る落葉の刀自其金子餘波多く返
 是れ眞の懺悔也幸ふと盜賊の悪名を削らる。這議甚
 慶と譚を吾足齋もびり頭を拾げ眼を閉て九四郎を見て
 片手を抗て戦とらち拜とて適れ愛を裁判る哉幸那財囊の金
 朱之女のま小渡りて捉遺されど飲ひるや老岸疾々といふ老岸の
 心と得小羞て立難を津向屋集三より身起し捨廊の
 件を財囊を合時猶庭の樹下小立在る男女三名在り集三是を
 透し見て客人達其首を寒くん母屋に登らるひねと呼被て先其財

囊の金を九四郎に呈せられ九四郎敢自由にせよと開か儘老芋の渡を
 云々と宣示せし老芋の辭ふことをゆゑ件の財囊を解披せし内なる圓金を
 合算せし紙封に二裏あり其裏の圓金百枚又一裏の九十五枚あり九四
 郎是をゆゑと見て又吾足齋に向ひていふや辛踏生掩云々と論じるとも強
 て和老を窘めて金を返せといふあゝと和郎の意裏甚麼をやと向ふを
 吾足齋ゆゑの志をいふも然らずとあらん返却の已が情願之宜しく計ひ
 めひねとのふ九四郎領を件の圓金二裏を合せて財囊に斂す折ら庭
 の方より咳く入り来る男女二三名あり阿夏の老芋の訝りるや誰也と
 問ひし見れば是則別人多し福富村の阿健小忠二又九四郎の乾兒の四
 徳等も出て来る主客亦這回答の憶も時を移し程小星の光りの弥寒た
 暁天をありけり介程小末朱之の晴賢ハ今宵脱路を失ひて只得酒井の才

を艱き透もあつた逃去らんと悄地ふ念とてありける其頭の庭の樹
 下の人二三名立在て久しくあつた心出てもあつたのうと頭をゆゑふより
 心もあつた母屋の主人の問答を洩せし盆九郎ハ杜四郎と六等ハ搦
 捕せしる晩縮の横死吾足齋ハ深痕を負ふ讎悔の條々思ひつけ
 る九四郎さ樹下より立ちて團坐ふ入りて談論の趣意表ふをるるも
 く又彼財囊のありける金往る夏の夜吾足齋が奪る小石の撰玉を染
 六ハ挑せし神出鬼没の機関を今やあつた曉ゆて天魔を欺く五人も
 且驚然且呆として酔るが如く醒るが如く惘然とてありける程小長は冬
 の夜時移りて早暁天ありし心跡安らうと天も明が見せられて俺も
 亦盆九の如く搦捕られて牽とせせんといふ生を思難て頭をゆゑ又
 隠る木偶の拮埒をふ似て苦心限りもあつた彼樹下ありける人の



朱之丸

六

小忠二

五十四童子別巻十四

文藝堂蔵



鉄鏡を飛
あつりけ
しめて
あまのまひのち
朱之丸命を
まかり
免る

九四郎

おいそ

の四郎

おんた

三石童子別巻一四

文藝堂蔵

うやうや母屋に入るを月明を窺み見とせ下りぬ九四郎ゆく
其後ろく阿鏡小忠三浪華の四摠等ありけと朱之次り又驚死て舌を吐
死頭を拊つ猶も四下を窺ふ庭中人のあはびありて既不便をばてけと六
井折ふ四りこまを掛て潜ひ入り堀裏の松を階子あ攀登りて堀を踏
まきまき程ふ米六軒く信と見て那朱之次りと叫びも果て刀を引提て擔
廊へ出るを見たる朱之次の袖に準備の席三錢を合するも尖く丁と敷る然し
も修練の銃鏡の米六の身を反して刀の柄を受留る程もあはれ朱之
次の身を跳りて外面へ忽地墮と飛下りて往方も知るはあけけるを米六も猶
進んて背門投てまきまきを九四郎急にお喚禁せ已ぬく開の要あり人の
數はもあはれお捕何せんといふ杜四郎も俱ふのやう現窮寇の逐ふを
くは彼が偷とばさるる財囊の金の茲に在り。そを追ふこと欲と諫むれば米

六僅ふ點頭て故の席ふよりて居り當下九四郎ハ石見ぬらち向ひて
高嶋主俺身総角ありはより久く打絶りけふ斯荒々た為体て
物稟えハ無礼なれども。詰まうて一美あり。這金二百九十五兩ハ目今買れ
情由なれば吾足齋のまより受合て落葉の媪返をまけけりぬ
るも。一旦偷を合られしより早五ヶ月を歴りし。這美を守(告訴も
せ)我私ハ和睦せよ後のゆえも影護くて快らざる所あり。今訴ん欲訟ぎ
ん欲。這美を教ぬぬねと問ふを石見ぬらちあま否。告訴のり然るべし辛
踏みつる新ふし罪を謝して返を金子なれば不正不良の財のゆえに然る
を慈小守の憲断ふ被る時の事むぐくものまきまき五足齋ハ後ま
で盜賊の罪免るべしと鄙言ふらるるあり。隱米も過て花を散。磨
くも過て玉を碎く。鯉直も亦時小由るべし。這美を思ひぬらちと説

きて九四郎再議ふ及び更ふ老若ふうち向ひて喃阿夏刀自定ふ和
 女郎の落命ある今より孤獨の人とあふべ何人欲よく養ん昔俺荊婦小
 夏の子藝受養育の恩を思ふ今這金子の半分を折給贈らまや
 したるまゝのうん這金の俺金を自由せ彼微生高が醜を乞れて
 其隣る醜を乞て人小興ふとのふ似さべ他の物もて已を飾る似而非仁
 美の俺要せを這美の俺亦主張あり異日又復談せしとつれて老若の
 蹴然い頭を拾けて登る昔小夏の五歳の比より九歳ふある秋の比まで
 五歳母と喚びて親甲斐もあつて倒々彼河原押給をまをて養れ
 日の多りし小養育の恩云々と宣ふことを取しけれと勸解を九四郎推
 禁めて無益の口誼ふ天の明らん俺の旅宿退る和子と柴六の要事
 あれども這里で聲をたふあつねば明日方館推参せん自餘の人達心を

屬ての主人夫婦の為小商量敵ありのひねと告別する財囊の金を
 合て懐杖と扱めて四徳を俱く遠く津向屋へ入り去りし石見
 小卒退んて杜四郎をいさる刀を衝きて身を起せば柴六の盆九
 郎小掛を索を合際て俱小玄園より去る時集三主僕主人小代り
 て門内まで送りける浩處小高嶋の若黨奴隸の常小異ある主のうまの
 最遅けとらちも指とを真夜中より迎ふと東西とあつ素托の料を
 今辛踏の門前を過ぎ程小主僕送ふ挑燈の花號を早く見出し
 走り集ふ云々と告め多言も示して石見の盗見盆九を伴當等小
 牽せり四郎柴六共侶小城内の宿所ふりや程小鴉の茂林を離
 る聲して天の耿耿と明ふけ然る程小辛踏の宿所ふり多客やうや
 立去りて是より暇あけと集三主僕小忠二共俱小老若を資けつ

先晩船の七散を小室小臥あて枕屏風を建ても果敢る。又吾足齋
 の衰果て湯薬も呪み降らねば丹が儘蒲團を布儲けて小襦をうち被る
 のと林もあ。當下老岸へ阿鏡小忠二を上坐小請迎て火桶小炭を接
 けいふ。別とまのりより年許多音絶てけり。俺身陸奥へ伴
 きて後夫小従つて然るを亦故ありて去歳の冬より這地小来てまじ
 住熟ぬ宿あれが知るせまの暇あ。本意あもあをけり。ふん身の
 又何等の故小這頭小逗留。あんん況今宵の凶変を益々自知られて
 訪とまのり有かたにまて悉死再會ふとてけり。郷小の客あうち紛れて
 何宣せやん逆上せのそあり。ふん漏りぬ鈍ま。さよ無礼を饒
 ののねと勸解と阿鏡の嗟嘆とて故あ。るを思惟れば世の夢あ。つと
 者あ。奴家今この為体の珠刀袷あ。るん。然るを亦思ひあ。る。隠

田のふふより有司達より下知あり。猛可小奴と小忠二を召よせむのひ
 へ福富村の店舗へ措名と丁太郎小任用して四五日前小這地小来り
 津向屋を宿小してあ。るれ。昨日あ身が背門の方へ出のひを見せ
 ものいりやと思ひ。まも珠刀袷も同居と小忠二のいふより。ま。訪もせ
 で在りけ。胸の潰れ。夜中の凶変うち措まを主人の後小眼にて来小
 ける甲斐もあ。か。歎れを見せ。あ。るれ。ま。と涙皆も脆き女子の袖の
 兩外の時雨も寒げ。る。小忠二も共い。あ。る。珠刀袷何とい。ら。ま。やん。郷
 小那子小訪と。後幾程もあ。悪瘡の病悩を豫知り。あ。る。断りい。え
 中。遣。の黄金の岳父船積氏。憚。り。のあ。と。珠刀袷の故蕩無頼
 敵。あ。る。者。あ。る。れ。然。ま。と。て。舊熟識のあ。身。の。落。魄。小。行。遣
 る。何。ぞ。の。難。面。く。の。せん。や。銭。帛。と。て。心。小。ま。ら。と。ね。故。翁。の。在。ま

とて隔ると思ひぬと慰められて又袖濡を老亭の臉を推拭く之俺
 子のころ良人き人ぬ不軌の顛末を知られし中目面なる昔熟識と
 思召を御好意あそ有ごけれといひ間小窓よりあつて鴉の聲を
 けき津問屋主僕に這凶変を疾里正の告んとく庭門より出て
 めたう阿健小忠二の開が儘阿夏の老亭を慰め拾便の
 来りつを俟あべ。介程小里正故老五保等の津問屋集三の告
 小より吾足齋の宿所来て老亭のい所を時定め馳一紙の訴状を相
 捧けて城内より有司小いえあが。是日未牌をり小実檢使到来し
 吾足齋と其妻老亭の稟を所を听定め且晩箱の亡骸を展檢し
 口状一通を筆録し但一吾足齋の深瘻を既命危ふられ其妻老
 亭と隣人津問屋集三等を相俣く城内より来る頭入一口鬼大夫

安倍小事云云と告し。馳て老亭集三等を局内小召させて
 鬼大夫みろく。鞠問を介する小辛踏吾足齋の深瘻を負せし
 け。盗見金九郎の昨宵大江杜四郎等小搦捕しを高嶋石見の
 の訴より。既小獄牢小繫とされ鬼大夫隨即夥兵小課て金九
 郎を牽出させて事の虚実を拷問する小金九郎が悪事の條々
 嚮ふ大江杜四郎の刀子を偷しるを始めて昨日吾足齋の乾兒の末
 朱之次小謀合されて更闌て俱小吾足齋の宿所小潜入りし。朱之次
 の親の金子を偷し合まき欲くと果さる早く逃亡し。又金九郎の吾
 足齋の頓鈴女晩箱を豪奪し走り去らまき折吾足齋より来
 て謬て晩箱を殘害し。及て金九郎小腹腹を刺れて仕。其際小金
 九郎の逃て門外。折石見の客と噂する大江杜四郎山峯張米六郎

等不搦捕まうとの首伏分明のけ鬼大失則識断まらう今
 金九郎の招了の據る小吾足齋小罪さうとのごも其乾見たる朱之
 女を走らせざるの事聞ふ似たり。但し吾足齋ハ深瘻ゆて命危あしと
 津向屋集三里正等女房老等を相資けて朱之女の往方を洗滌て
 將て参り下と宣示して是日の廳ハ果ぬけり。然る老等ハ里正故老津向
 屋集三等と共小退りて宿所ふりの來ぬれば是日の留守を憑とる福
 富小忠二阿健等ハ遠く立迎て事云云と生口をせやく小吾足齋ら
 仙丹の奇效も茲小竭ぬけん齋小老等がわてぬ後幾程もあく
 面色變りて忽然と息絶さうといふ豫期しるもあかぬ老等ハ孤狸の林ハ
 離と寶鷹の對を喪ひ心地と今さうせん術を知らむ扱あふんぬ
 わざらへ里正故老等の又公同所へ走参りて吾足齋の死しけるを訴

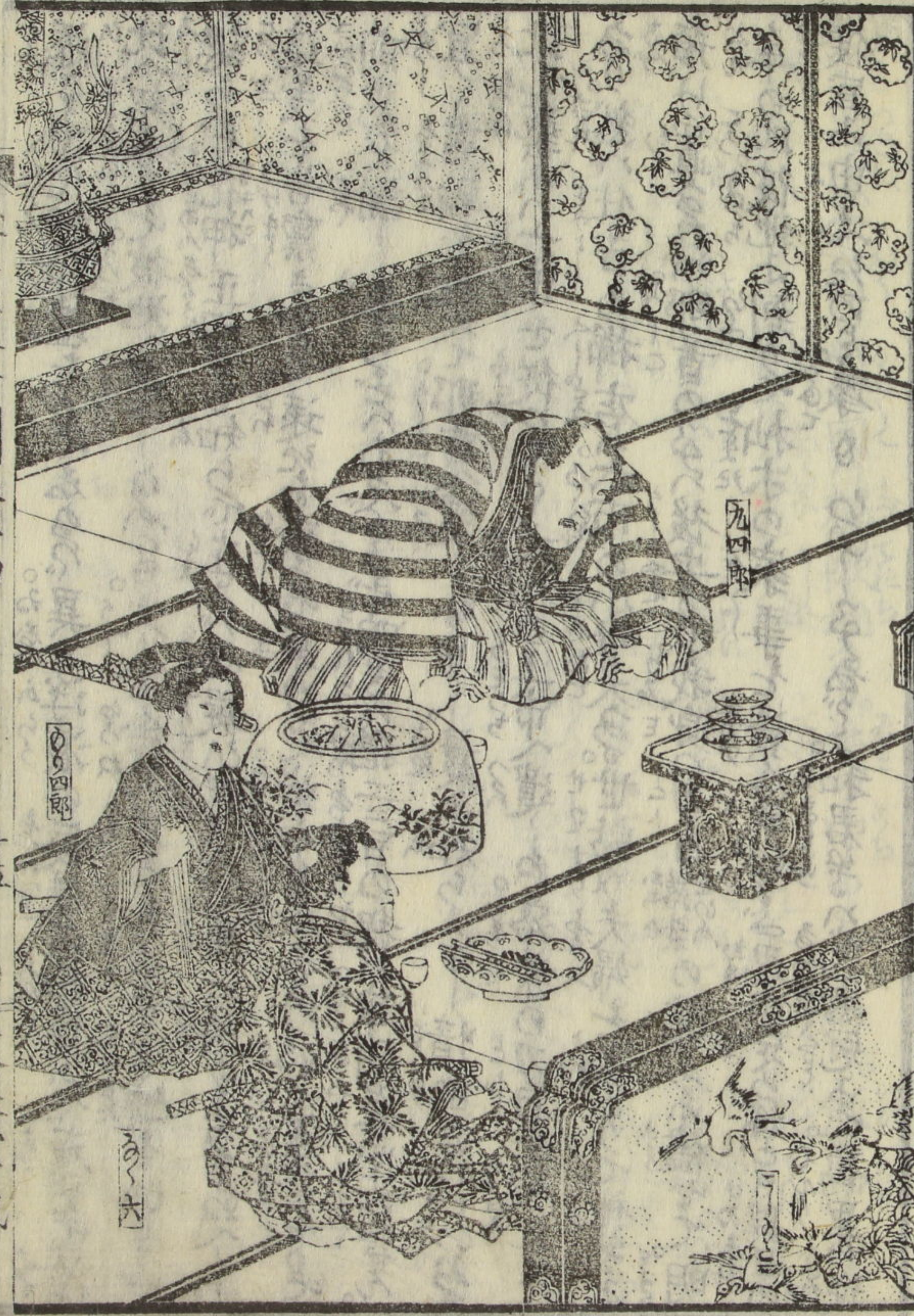
稟を不重て突檢使を下さふ及まを女見晚箱の亡骸と共侶小隨意
 安置く下と命せらる是ふより小忠二集三等相資けて吾足晚箱父
 女の柩を程速くぬ山院へ送遣て当晚茶茶昆の煙と做る練二塊
 の土饅頭小表識の墓石を貽せり。識者吾足齋を評せり。寧
 成の浮薄なる彼身辛踏无四郎さう。時親小仕へ孝あも君小仕へ
 て忠あも周防へ使節を奉りぬ。色を貪り慾を恣ふて阿夏母
 子を相携へ歸洛あるのそあも其子を棄其母を俱して舊里信夫
 小かくふ及びて父の真愛小値あか。敢戚る色もあ。淫酒の驕奢小財
 用足くねべ人の孤女を養ふて又其色を衒ま欲し。を専
 詭詐を行ふ及びて事敗と追放せらる。近江小流寓ある時女見晚
 箱の悪瘡の良藥を徴す折人の争ふ金を偷めて石を其財囊小入

易し遠謀ありふ似されども罪其石より重きを知らむ古語所云兩虎
肉を争ふ時孰其虚ふ乗るもの者是と其後妻の子は朱之ぬの
より拘神を以て晩箱の悪瘡愈たれども約を變けて朱之ぬ其價の百
金を取せども老岸か実を破るふ及びて是より後安しと思へり是故
小災害蕭牆の内より起りて罪多に晩箱の命を隕し彼身の盗見
盆九郎小刺して命終る時其隱意を懺悔するの抑又遅くもや世に權
威ある奸佞者の忠臣を冤げ善人を屠或は山豪海賊の人を殺すと草の
如く財貨を奪ふ飽とる人を人見て悪あつとて以て者あり單辛踏吾足
の如く見の然る西心虐あり其心術を推時の根賊狗盜と是一般あるを
て天公饒さど竟小滅族の祟あり世小の境界小迷ふ者比々して
皆是へ開か中小晩箱の如く浮海の親小徒ひる其心親小似も多賀

志賀政賢と替婿の氷入ありしより。閩門を固くし朱之ぬの
挑を容れんとす。養父母小相仕へ毫も愆あるとる死小友て非命小早
く逝く善悪心報無差別小似されども然小あも善男善女も其君
父不仁不美の時共小禍を免まを便是蓬の中小生出り麻の直死は及
人の鎌見を免はる如く。遮莫其死後小至りて人其善を相稱其節操
を嘆唱を死して悪名を貽者と雲壤の差あり古語ありり。虎の死して
皮を留め人の死して名を留む名小あり善と惡との。慎むわんくはを
いひける。其の言早く流布する志賀政賢は情地小父政朝小告ていひ
や。吾足の女見晩箱の如く親の兄も似るもの。其故の箇様々々
と件の批評を證據めは政朝是をうち嘆て感嘆幾淺くも他か命運落
ると其苦節を憐れて彼山院へ多く布施して晩箱の為小經を讀せし惜

地は追薦の志を致しけり。問話休題介程十三屋九四郎は彼夜又辛踏の宿所にて四郎染六の對面の後第二日小至りて彼主僕の旅宿せり。高嶋生を訪まじ思ひて湯浴一結髪をせし且衣裳を整て四摠此の土産を齎し旅宿屋を去りてゆく程小忽地高嶋の奴隷索ね來て主の消息を呈聞是則石見及び九四郎を請廻り使ありけり。九四郎隨即其使を案内し四摠を俱りて高嶋の宿所來りけり。彼家の老僕出向へて客房小請待志主人の益可小君所へ召れり。僅方出仕し父も必程早く歸宅をせし先和子達小對面ありて當下杜四郎等が常小居る彼一室小案内し看茶の禮細かき四摠も客房小呼登され九四郎が主人小贈る土産幾種を老僕某小液しめを當下杜四郎染六の邊へ九四郎を上坐小請薦めて寒暖を舒恙あるを祝

祝されり。然而前夜の盗見金九四郎の石見及び計ひて有司小牽渡りて歸て禁獄せられし。是れ小より大江家傳の刀子をとり復しける。の顛末又國守佐々木殿杜四郎染六郎を懇望のあり云云の美禄を食せ家臣小做さす欲しめを固く辭ひありし。上ハ其小立去るべしを彼刀子の故をりて逗留今小及ぶといひ密話を九四郎らて開けし。既に仕を辭ひし。猶其城内小逗留せし人の譏詰もある。宛致事の宣死小ありされ。彼金九四郎の罪定りて一件都着落せり。早立去りあり。嗚呼。這回和君等の迹を追ひて這頭來ぬ。別美小あり。是來春ハ亦講伏計小誘引て嚴嶋の辨財天小參詣せし。思ふに然ハ治比小立よりて大人小元をの安否を訪まじ欲し。四郎腹子ハあの折をりて大人と兩舎兄小自筆の消息をまのせし。



十五

文治堂藏

九四郎を請待
 石見の師恩
 父合ふ



文治堂藏

添ふ花押印鑑をりて志のり。異日浮浪の伎傑小相逢ふて驚めて治
 比へ紹々して彼地へ遣へる。大人と舎兄達と和君の自迹をいまご
 認らば花押正印も知らず在る必疑ひ思ひて事の障りあるべし。
 這美を告禀えんとて遠路を厭ひて来ぬる。柴六も介あつて呈書をし
 前惠を謝し奉らばあつて。咱等へ猶二三日の程の津向屋の上宿せん。
 宜く書翰を整へて那首へ遣へる。曩の知らざりし情由あるべし。
 比し藝小の六市を従ひて。大和の上市へ遣へる。落葉の刀自を慰んを
 あり。然る住吉の櫛店六市の小母夫の世話夫婦を召たりて他等小
 預け置るれば那首のふ後安らり我身の刀自落葉の請ふ儘せて明
 年の比彼地小到りて。拙木の家事を資ん欲いし。思ひ定り候ども異日の
 便宜小由るべし。縁のりひひるる。和君等へ尚弱冠也。萬里の逆

旅小光陰を送らば去向の都敵地あり。笑の中ゆも刃あり。飯の中ゆも
 鍼もたふあつて。齋小刀子を失ひ。敵地を忘れて怠慢の際あり。故
 多べし。然る小心を宗とて。女藝小誇るべし。其已小勝るを憎む小
 人の心と和君等。未知のふあるを九四郎あんと博士態する。意見の孔子小
 語道小似されど鄙語小の外視八目離婁の明も其替をふらる見かくたを
 のて悟るべし。柴六もよく記慮して主僕を足らざるを補ひ。後安るべし。這
 美をりて忘れぬ。そのの教訓可憐あり。柴六のふもさ。杜四郎歡ひ来て
 其議小據らばといふ者も。猶因談小及ぶ程小以前の老僕如て来て九四郎
 等小告るや。主人歸宅仕りぬ。和子達も共侶小誘。這方と先小立て在與る
 一室小案内をある程小杜四郎柴六も九四郎の後方小立て。儒の席小進
 る時。負女と迎へ九四郎等を客坐小請ふ。其の口誼言説と。若輩等茶

を薦めらるるを當下九四郎のゆゑ。前夜の不慮のゆゑより。殊小鄙陋の爲
 体を卒余小拜見仕り。後今日。芳館小伺候せんと。放宿をせまらるる
 の折。使をゆりて。拜門遲滞の罪をゆり。別又杜四郎。栄六等。が昔縁の差
 小伏りて。貴所小投宿をせり。しより。施留三四十日。及ぶる。在下まゝ。飲思ふ
 幸是小優を者あり。との心を石見及。時。我身少あり。時。幸張先
 生小負。及。て。教育の恩。浅らざる。ふ。て。六。納。袴。小。敷。れ。より。疎。淵。本。意。小
 背。り。ふ。這。回。西。子。小。訪。れ。り。得。小。昔。恩。主。て。師。恩。萬。分。の。一。小。答。へ。死
 折。を。ゆり。と思。ふ。の。ろ。ろ。微。禄。款。待。小。置。く。と。汗。顔。の。外。ゆ。り。と。況。和。敷。小。訪
 せん。と思。ひ。ゆ。り。幸。ゆ。り。と。酒。を。薦。め。る。と。思。ふ。請。迎。へ。小。極。小。仕。候。故
 本。を。意。外。の。無。礼。と。思。ふ。と。言。言。言。言。と。又。卷。を。續。ぐ。小。至。れ。り。自。餘。小。下。回。辭。免

新局玉石童子訓卷之十四終



